

蒼穹のファフナーif ～みんなここにいる～

ライフオギア

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

君は知るだろう。

奇跡とは、起きるものではないという事を。

待つだけでは奇跡は起こらない。

代償を支払えば、必ず起こるものでもない。

だが、足掻き、苦しみ、それでも諦めずに可能性を求める。

それがあったからこそ、一生懸命が、奇跡を手繰り寄せた。

目次

最後の蒼穹作戦

彼らの前には、北極ミールがいる。

一度は砕き、数多の群れとなった筈の、アザゼル型やボレアリオスに分かれた筈の北極ミールが。

それは人間に憎悪を抱くフェストウム達が己の敵は人間であると見定め、フェストウム同士で、ミール同士で同化を果たした姿。

お互いに敵対していたミールもあつたが、どれよりもまず人間を殲滅する。

それほど人間を憎みはじめたミール達が利害の一致による同化により融合し、北極ミールのような巨大なミールと化した。

元が北極ミールだったミールの全てが融合しているわけではないが、その力は脅威。

暫定的に『ウロボロス』と名付けられた再生北極ミールは彼らと対峙していた。

だけど、希望もまた、大きい。

ジークフリードシステムと呼ばれる、全ファフナーと感覚を共有し、全ファフナーの管制を行う。いわば司令塔の座る場所。

そこに彼は、皆城総士はいた。

ジークフリードシステムは最大12機までとクロッシングを可能にするが、今回は各ファフナーにもファフナー同士でクロッシングを可能にするクロッシングシステムが搭載されている。

つまり、ジークフリードシステムとクロッシングシステムを併用していた。

本来であればどちらか、というかクロッシングシステムがジークフリードシステムを分割したもので併用に意味はない。

だが、今回は事情がある。

1つにファフナーの数が多すぎる事。

ジークフリードシステムは最大12機までのファフナーとクロッ

シングできる。

が、今回は12機以上いるため、流石にジークフリードシステムだけで捌き切れない。

なので各フアフナー間でも相互通信を可能にしておき、総士だけに負担をかけないようにしたのだ。

パイロットが処理できる事はパイロットが、他は司令官である総士が、という役割分担の為である。

また、もう1つの理由には総士の我儘があった。

全フアフナーを動かした時、パイロットは足りていて、総士が乗る機体はない。

しかし彼も戦いたかった。みんなの痛みを共に背負いたかった。

だから、ジークフリードシステムを使ったのだ。

彼も共に戦うために。

「みんな、聞いてくれ」

ジークフリードシステムに座す総士は、既に全フアフナーと、全パイロットと感覚の共有を完了している。

そう、『全てのパイロット』と。

「僕達が誰一人欠けることなくここまで来れたのは、奇跡に近い……いや、奇跡だ」

一騎がいる。総士がいる。真矢がいる。

剣司がいる。咲良がいる。甲洋がいる。

「だが、夢じゃない。間違いなく僕らは、ここにいます」

里奈がいる。慧がいる。美三香がいる。

零央がいる。操がいる。

そして――。

「誰かいなくなってもおかしくなかった」

翔子がいる。衛がいる。道生がいる。

広登がいる。暉がいる。芹がいる。カノンがいる。

「一度は、生存を絶望視された者もいる。

犠牲だって出た。だから手放しに喜んでいいかは分からない。

だが、それでも……」

ジヨナサンがいる。ビリーがいる。アイがいる。

ウォルターがいる。ナレインがいる。

「ここにみんなでいれることを、僕は嬉しく思う」

みんな、ここにいます。

総士の言葉は冷静だった。

だけど、クロツシングをしているから分かる。

いや、それがなくとも総士を見続けて来た彼らにとつて、彼がそんな言葉を口にしたというだけでも、彼がどれほど嬉しいかが伝わって来た。

紅音、公蔵、誠一郎、彩乃、千沙都、一平、オルガ、L計画の面々、果林。

多くの島民達が、家族が、同僚が、先輩が、いなくなった。

だから総士は言った。手放しに喜んでいいかは分からないと。

だけどそれがあるから、彼らはここにいます。

彼らに譲ってもらった命と未来を紡ぎ、ここにいますのだ。

それだけじゃない竜宮島の外の人々にも助けられた。

あの時、オーラロードが開かなければ、翔子は死んでいたかもしれない。

あの時、ラインバレルが未来に飛ばされてカノンを手伝っていないければ、SDPの酷使によってカノンは消えていたかもしれない。

あの時、刹那が人類軍の敵意に気付かなければ、広登は撃ち抜かれていたかもしれない。

あの時、ゼロフアフナーだけに頼らずに全員で攻撃しなければ、無茶が祟って暈が消えていたかもしれない。

偶然は多い。

けれど、間違いなく起こった偶然だ。

例え偶然でも最高の偶然を、最高の可能性を掴み取ったのは、彼らが精一杯力を尽くしたからだ。

それを見つめる大十字九郎の、アル・アジフの、デモンベインの目は優しい。

「いいねえ、ああいうの。」

荒唐無稽の陳腐なハッピーエンド、上等じゃねえか！」

九郎が吼える。

それを諫めるような、しかし笑みを浮かべながら、アルが続く。

「エンドではない。ここを乗り切らねばな」

「応！ けどよ、ここまで来たんだ。」

ぜってえ、誰一人欠けないで終わってやらあッ！」

それに続くは、刹那・F・セイエイ。

彼もまた、フアフナーパイロット達の無事を喜ぶ一人。

「フアフナーやフェストウムの特性を考えれば、消えてもおかしくない者もいた。

だが、誰も欠けずに生きている。ならばその奇跡を、俺達は繋げる！」

そしてまた別の人間がいた。

彼らの勢揃いを見て、笑顔とテンションを一切抑えない者が。名を早瀬浩一。ラインバレルのファクターであり、カノンが生きながらえている立役者だ。

「全員で生き残って最終決戦……。ナイスな展開じゃないか！」

彼の言う『ナイスな展開』になったのは、浩一が尽力したお陰でもある。

そんな浩一を制したのは、彼の同級生でもある秋津マサトことゼオライマーだった。

「テンション上がるのはわかるけど、相手は今までにない強敵だ。油断するなよ？・浩一」

「分かってる。ここまで来てヘマはしたくないしな！」

彼らは同級生の中学生であり、元は何の変哲も無い学生だった。

しかし様々な運命が彼らを導き、今、ここにいる。

ひよつとすれば、マサトも消滅するかもしれない運命にあった。

だけど、ここにいる。1人の人間として。

まだ仲間はある。

浩一に呼応するように会話に入って来たのは、チームラビッツリーダー、レッドファイブのパイロット、ヒタチ・イズルだ。

「でもホントにいいね、ああいう全員集合！・ヒーローの最終回みたいだ！」

「お前、この状況でもそれかよ……」

同じくチームラビッツのブルーワンことアサギ・トシカズが呆れたように言う。

いつもの事、と言えばそれまでだが。

「でもさ、いいじゃない。みんなで生き残るのって、嬉しいし」

イズルがさらりと発した言葉は、聞こえ以上に重い。

そう、犠牲はあつた。知り合いも赤の他人も含め、この戦いはそういう戦いだつたのだ。

生き残るのは難しい事だ。

戦場に出ているからこそ、それがよく分かる。

だからこそ、身内が生き残っている事を不謹慎かもしれないと分かっていても、喜びたくなる。

「さ、僕達も頑張ろう！ 帰ったらみんなで……」

チームラビッツのメンバーがイズルの言葉に耳を傾ける。

そして――。

「パーティーしよう！」

盛大にずっこけた。

「お前もそれかよ!？」

ゴルドフォアのパイロット、スルガが叫ぶ。

お前も？ と疑問符を浮かべるイズルだが、その疑問を口にする前に畳み掛けが来た。

「もつとリーダーらしい事を言って欲しいのら！ バカアホおたんちんアホ！」

ローズスリーのパイロット、イリエ・タマキが叫ぶ。

「らしいけれど……気が抜けるわね」

パープルツールのパイロット、クギミヤ・ケイが呆れる。

「あの……もつとびしつとしたのをお願いします。アサギさんじゃないんですから」

ブラックシックスのパイロット、クロキ・アンジュがさらりとアサギにも毒を吐く。

「どういう意味だアンジュ！ くそつ、イズルのせいだからな！」

とぼつちりに怒るアサギ。

それに対してイズルは。

「今の……総ツッコミされるとこだった？」

イズル以外の5人が頷く。

たはは、と力無く笑うイズルだが、すぐに普段の笑顔に切り替えた。醸し出す雰囲気は、非常に真面目だ。

「でも、みんなでパーティーしたいんだ。

誰も欠けずに、終わってパーティーができるくらいに、明るく、最高に。

だからみんな、頑張ろう！」

嘘偽りないイズルの言葉。

ただ祝勝パーティーしたいのではない。

パーティーができるくらい、明るいハッピーエンドを迎えたい。その意を汲んだ他の5人は優しく頷く。

その願いは、チームラビッツ全員が願う、共通の思いだった。

そして、当のフアフナーパイロット達は。

「総士がそんな風にいうなんてな」

剣司が笑う。

ここまで生の感情を分かり易く言葉にしたのはいつ以来か。いや、初めてか？

同期がそう思うくらい、総士の言葉は直球だった。

「不器用なりに頑張ったって感じじゃない？」

咲良が旦那に続いてニヤリと笑う。

からかわれる総士は表情を硬くしていた。

「自分の思いを口にしたまでだ。クロツシングで伝わっているだろう」

「そうなるまで、今日までかかったのにね」

真矢の言葉に押し黙る総士。

彼は真矢に弱い。だが、それを差つ引いても凶星だ。

いちいち言い方が遠回しなせいで誤解があったり、言葉足らずだった事は多い。

そんな不器用な彼がここまで言ったのは、総士をよく知る人間としては面白かったのだろう。

「だけど、響く言葉だったよ、総士」

「うん。頑張ろうって気になれたよ」

甲洋と衛が正直な言葉でフォローする。

その思いもまた全員共通。総士の思いは、みんなの思いだった。

「ここまでみんなで来れたことが嬉しい。妹もできて家も賑やかになったから。」

ね、カノン？」

「ああ。そうだな姉さん」

「おつ、カノン、すっかり妹って感じだな！」

「道生！ からかわないでくれ！」

翔子の事を姉さんと呼ぶのに最初は抵抗や戸惑いもあったが、数年経った今ではすっかり姉妹。

昔の堅物なカノンを知る道生からすればその変化は面白くあり、同時に嬉しいのだろう。

「いいなあ、カノン先輩のお姉さんは。」

ウチの姉もあれくらいお淑やかで可愛げがあればいいのに」

「暉、なんか言った？ っていうかクロツシングで筒抜けよ！」

こっちは姉弟喧嘩になりそうな西尾姉弟。

こんな風に言い合えるのも生きているからこそだ。

「り、里奈先輩は十分女の子らしくて、可愛いですよ！」

精一杯フォローする慧。

彼は里奈の事が好きなため、彼女を褒めようとするが恥ずかしくて顔が赤くなる。

クロツシングしている状態でそんな事考えて大丈夫なのだろうかと思わなくもないが、まあ後の祭りである。総士含め、みんなは何も言わない事にした。

「なっ……なにバカなことやってんのよ！ 鏑木！」

「す、すいません!?!」

微笑ましいものである。

そんなやりとりを大いに穏やかに見つめる芹。

「いい人見つかったんじゃないの？ りーなっ」

「あんたも何言ってるの！」

戦場に身を置いていたとは言え、年頃の男女だ。

そういう話題も盛り上がるわけである。

この場で話す事ではないと思うが。

「おっしやあ！ 気合い入れていくぜ、後輩！」

「美三香ラジャーです！ ゴーウバインツ！！

ほら、零央ちゃんも！」

「い、いや、俺は……」

広登が音頭を取り、ゴウバインな後輩の美三香が乗っかり、巻き込まれる零央。

しかも吹っかけてきたのが想い人である美三香なのが零央にとっては悲劇であり、そんなわけで断りきれない零央は巻き込まれた。

なお、衛が乱入して事態がトリプルゴウバインと化し、それを剣司と咲良が止めるまで零央はこんな感じであった。

戦闘前だというのに緊張感がない面々。

ここまで生き残ってこれた事への喜びか。

いや、それだけじゃない。

もしかしたら、バカみたいな事を言い合えるのが今日だけかもしれないと言う『もしも』への恐怖。

この後も絶対に全員で生き残るという決意。

みんながいる事への純粋な喜び。

そんな複雑が想いが混じっていた。

死ぬかもしれない戦いの前だからこそその明るさ。

この後も生き残る為に、生きる事を諦めないための燃料を心に刻み

つけているのだろう。

総士にはそれが分かる。クロッシングしているから、そして、自分もそうだから。

「なんだか楽しい！ この先もずっと、楽しくいたいよね！」

操の無邪気な言葉に、全員が押し黙る。

唯一言った本人の操のみがキョトンとしていた。

この先もずっと。

そうしていたのが本音だ。

でも、そんな保証はどこにもない。

いつ碎けて消えるかわからない。今日の戦いで死ぬかもしれない。

生きるのを諦めているのではない、純粋な恐怖。

自分が死ぬ事、仲間が死ぬ事。

失ったものがあるから、怖くなる。

「そうだな、楽しい時間がこの先も続く。」

この先の未来がどうなるか分からないが、全員生き残れば、きっと未来は明るい」

総士が口を開いた。

「僕達は先へ進む。戦いを終わらせて。みんなで、だ」

それは総士の決意。

「指揮は僕が取る。だが、1つだけ。」

どんな指揮よりも優先される命令を、あらかじめ通達するこの命令は、どんな指示を無視してでも守れ」

そしてそれは――。

「全員で、生きて、帰るぞ」

ここにいる、みんなの決意。

「行こう、総士」

穏やかに全てを見守っていた一騎。

彼は優しく総士の名を呼び、それに総士も頷きで答えた。

「総士と2人なら飛べる。」

「だけど、みんな一緒なら、もっと高く飛べる」

「ああ。……その通りだ！」

ここに始まるのは、生き残るための戦い。

存在し続けるための、最終作戦。

「全ファフナー！　これが最後だ。最後の……」

青い空に希望を乗せる、究極の作戦。

「蒼穹作戦、開始！」

全ファフナーが総士の指示により動き出す。

クロッシングシステムとの併用により、剣司や隼のように指揮能力が高いパイロットが細かな指示を飛ばす。

複数の人間が指示を出しても、クロッシングしているから問題ない。

剣司の直感的な回答が総士に伝わり、総士が戦局を組み立て、細かな指示を隼が補正する。

クロッシングによりロスタイムなしで行われるそれに、パイロット

達はついて行く。

それに合わせるようにラインバレルが、ゼオライマーが、デモンベインが、ガンダムが、数多の仲間達が続く。

フェストウム側も無抵抗で終わってはくれない。

今までにないほどの物量が、力が襲いかかる。

アザゼル型との戦いの方が楽とすら思えるような過酷で苛烈な戦いが始まるのだ。

だが、諦めない。

勝って、生き残る。

そしてフェストウムに伝えるのだ。

人はそれぞれ違う意志を持ち、我々は敵対したいのではないと、分かり合いたいと。

分かり合えたフェストウムもいる。操もそうだし、甲洋が人の意志を保っているのも、一度は消えた総士が戻ってこれたのもフェストウムと通じ合ったが故。

数多のミールに分かれ、ミール同士で敵対関係をしていたのなら、人間も一枚岩ではないと分かるはず。

憎む心を知れたなら、争いを憎むこともできるはず。

フェストウムと、分かり合うことはできる。

もう一度言おう。

今回の戦いは生き残る為の作戦。

そこに例外はない。

人も、フェストウムも。

人がフェストウムに打ち込んできた生命の痛みを、存在を、その積み重ねを。

ここで、最良の形に昇華させる為に。

「一騎！ 頼むぞ!!」

「ああ、お前がそう言うならー!」

ハッピーエンドは、すぐそこに。